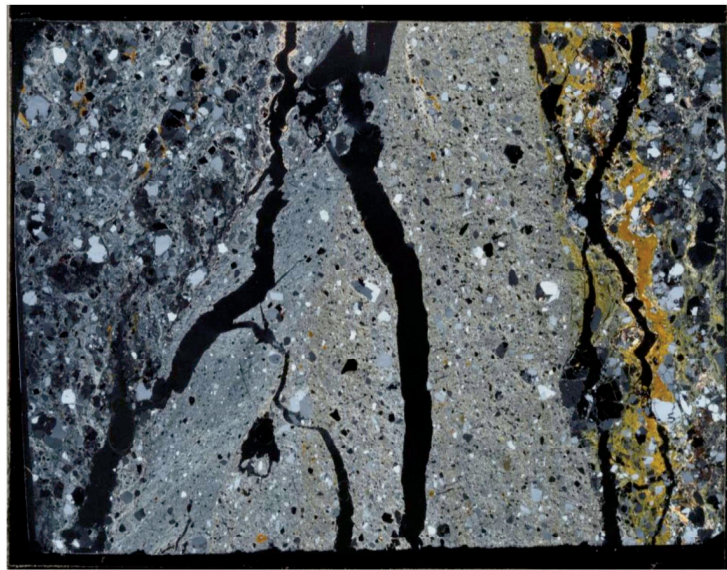


H24-H-6-1深度9.58~14.36m 最新活動面の位置 (No.最-2) を変更

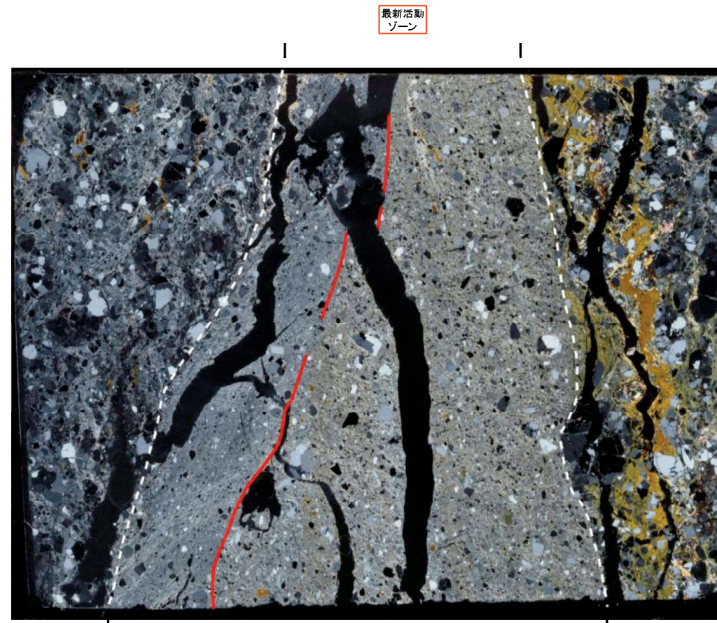
H24-H-6-1 深度9.58~14.36m 薄片観察 最新活動面の認定

- 深度9.58mにおける断層面β沿いの最新活動ゾーンでは、他の構造に切られていないY面Aが認められる。その分布を以下に示す。
- Y面Aはやや湾曲して直線性に乏しく、連続性に富む。細粒部を伴う。
- Y面Aのみが認められることから、Y面Aを最新活動面と認定した。



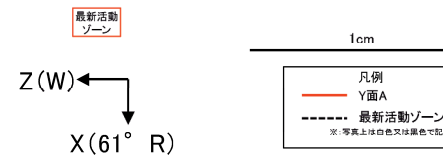
直交ニコル 全景写真

1cm



直交ニコル 全景写真

1cm



※Y面は確実に認定できる部分のみを記載しており、割れ目や不明瞭箇所では記載していない

### 1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・破砕帯範囲を45.91～45.94m (No.最-3) , 46.30～46.45m (No.最-5) 及び47.64～47.75m (No.最-7) に変更

【理由】複数のせん断面が見られるため、CT画像を用いて破砕部範囲を見直した

・破砕部番号を①-1 (No.最-4) , ①-2 (No.最-6) , ①-3 (No.最-8) に変更

【理由】①破砕部から抽出した3つの破砕部について、深度が浅い順に枝番を付けて識別した（副次的変更であるが、番号変更のみのため説明資料は省略）

・破砕幅を10.8cmに変更 (No.最-9)

【理由】従前の破砕帯範囲45.91～48.28mにおいて、最新活動面としていた箇所を含む破砕帯が①-3の箇所であるため、変更後の破砕幅

【断層連続性評価への影響】あり (No.最-38, 最-39で説明)

### 2. 変更箇所

a 性状一覧表に破砕帯範囲の変更を反映 (No.最-3～最-9)

H24-D1-1 深度45.91~48.28mについて 破砕帯範囲を45.91~45.94m (No.最-3), 46.30~46.45m (No.最-5) 及び47.64~47.75m (No.最-7) に変更  
破砕部番号の変更 (No.最-4, 最-6, 最-8), 破砕幅 (No.最-9) の変更

従前

見直し後

第833回審査会合  
机上配布資料2  
敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について  
参考資料2 性状一覧表  
参考2-185頁

第833回審査会合 机上配布資料2に追記(青太枠)

No.最-3~最-9

1つの破砕部

No.最-3~最-9

3つの破砕部を抽出

15非モデル化破砕帯  
性状一覧表(13/19)

調査番号	破砕帯番号	破砕帯深さ (m)	延在長さ (m)	幅 (cm)	傾斜 (%)	方位 (°)	傾斜角 (°)	破砕帯の性状	破砕帯の構成	破砕帯の厚さ (cm)	破砕帯の状況	破砕帯の位置	破砕帯の向き	破砕帯の形状	
1)	H24-D1-1 破砕帯47	45.91	46.30	50	10	東	南	-	-	35	正	東	北	45.91~46.30	
															46
															47
															48
2)	H24-D1-1 破砕帯48	46.30	46.45	10	11	東	南	-	-	31	正	東	北	46.30~46.45	
															49
3)	H24-D1-1 破砕帯47	47.64	47.75	10	10	東	南	-	-	30	正	東	北	47.64~47.75	
															50
4)	H24-D1-1 破砕帯47	49.00	49.01	10	10	東	南	-	-	10	正	東	北	49.00~49.01	
															54
5)	H24-D1-1 破砕帯47	53.71	54.14	10	10	東	南	-	-	70	正	東	北	53.71~54.14	
															56
6)	H24-D1-1 破砕帯47	55.91	56.30	10	10	東	南	-	-	-	正	東	北	55.91~56.30	
															60



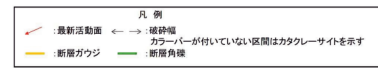
【破砕幅】  
粘土状破砕部、砂状破砕部、角礫状破砕部、固結した粘土状破砕部、固結した砂状破砕部、固結した角礫状破砕部の合計の幅とし、破砕帯の走向傾斜から真の幅に換算した。  
【平均さ】  
平 : 滑 : 最新活動面が連続的なもの  
非平滑 : 最新活動面が間断するもの

参考2-185

調査番号	破砕帯番号	破砕帯深さ (m)	延在長さ (m)	幅 (cm)	傾斜 (%)	方位 (°)	傾斜角 (°)	破砕帯の性状		破砕帯の厚さ (cm)	破砕帯の状況	破砕帯の位置	破砕帯の向き	破砕帯の形状	
								平均さ	平均さ						
H24-D1-1 破砕帯47	①-1	45.91	46.30	50	10	東	南	-	-	35	正	東	北	45.91~46.30	
															46
															47
															48
H24-D1-1 破砕帯47	①-2	46.30	46.45	10	11	東	南	-	-	31	正	東	北	46.30~46.45	
															49
H24-D1-1 破砕帯47	①-3	47.64	47.75	10	10	東	南	-	-	30	正	東	北	47.64~47.75	
															50
H24-D1-1 破砕帯47	①	49.00	49.01	10	10	東	南	-	-	10	正	東	北	49.00~49.01	
															54
H24-D1-1 破砕帯47	②	53.71	54.14	10	10	東	南	-	-	70	正	東	北	53.71~54.14	
															56
H24-D1-1 破砕帯47	③	55.91	56.30	10	10	東	南	-	-	-	正	東	北	55.91~56.30	
															60

(No.13で説明)

※1 断層区分の総合評価に基づき記載し、肉眼「有」のうち総合評価「無」となる箇所は「-」を記載  
※2 異のボーリングの場合は、計測値を補正した値を記載  
※3 連続しない破砕帯については「-」を記載(両端が「-」は薄片観察を行っていない箇所)  
(上記以外) : データを取得していない箇所



第7.4.1.412図(1) 破砕帯性状一覧 (H24-D1-1)

6-7-1587



H24-D1-1 深度45.91~48.28mについて 破砕帯範囲を45.91~45.94m (No.最-3) , 46.30~46.45m (No.最-5) 及び47.64~47.75m (No.最-7) に変更

- 当該破砕部は、複数のせん断面が見られるため、CT画像を用いて破砕部範囲を見直した結果に変更した。

- 深度45.91~48.28mの破砕部は、破砕部範囲内に複数のせん断面が認められる。最新活動面の認定フローの見直しによりCT画像を使用してコアの内部構造をより詳細に観察し、せん断面周辺の構造を三次元的に確認した。
- コア観察の結果、明瞭なせん断面を伴う破砕部区間として、以下を抽出した。  
 ①: 深度45.91~45.94m, ②: 深度46.30~46.45m, ③: 深度47.64~47.75m
- また、CT画像を観察した結果、破砕構造が見られない箇所が破砕部範囲に認められたため、破砕部の範囲の見直しを行った。

ボーリング柱状図

●45.91~48.28m: 破砕部  
 45.91~45.94m: 粘土質礫状部 (Hb)  
 上端52°, 下端35° ともに直線的でシャープに連続。径1~2mmの石英粒と径5mmで粘土化した花崗斑岩の岩片を多く含む。軟質。明赤灰色を呈する。幅30mm。  
 45.94~46.41m: 粘土混じり岩片状部 (Hj)  
 上端35°, 下端15° ともに直線的でシャープに連続。径10mm前後の岩片間を幅1~2mmの軟質な白色粘土脈が網目状に分布する。浅黄褐色を呈する。  
 46.41~46.45m: 砂混じり粘土状部 (Hc-2)  
 上端15° で直線的にシャープに、下端20° でやや波打ちながら連続。径1~3mmと少量の径5mmで粘土化した花崗斑岩の岩片を含む。やや硬質。浅黄褐色を呈する。幅25~30mm。  
 46.45~47.64m: 粘土混じり岩片状部 (Hj)  
 上端20°, 下端20° ともにやや波打ちながら連続。径5~20mmの岩組織がほぼ消滅した花崗斑岩の岩片と岩片間を縫うように網状に分布する幅1~2mmの白色軟質粘土脈及び46.80mでは幅3mm、57°の灰黄褐色粘土などからなる。明黄褐色を呈する。46.77~46.79mのほぼ水平に分布する暗褐色の細粒部については、コア掘削時のコアの供回りによるものである。  
 47.64~47.65m: 砂混じり粘土状部 (Hc-2)  
 上端20° でやや波打ちながら、下端0° で直線的にシャープに連続。径1~2mmの石英粒と少量の粘土化した径5mmの花崗斑岩の岩片を含む。やや軟質。明赤灰色を呈する。幅10~15mm。

コア写真



47.65~48.18m: 粘土混じり岩片状部 (Hj)  
 上端10°, 下端34° ともに直線的でシャープに連続。一部で岩組織が残留、一部で消滅した径5~20mmの花崗斑岩の岩片と岩片間を網状に分布する幅1~2mmの白色軟質粘土脈からなる。明赤灰~明褐色を呈する。  
 48.18~48.26m: 粘土質礫状部 (Hb)  
 上端34°, 下端68° ともに直線的でシャープに連続。径1~2mmの石英粒と下部に硬質岩片を残すが、これ以外は粘土化した径5mm前後の花崗斑岩の岩片からなる。やや硬質。灰白~明黄褐色を呈する。幅40~70mm。  
 48.26~48.28m: 砂混じり粘土状部 (Hc-2)  
 上端68°, 下端68° ともに直線的にシャープに連続。径1~2mmの石英粒を少量含む。やや硬質。明黄褐色を呈する。幅6~8mm。下端の灰白色の細粒部は不連続である。

凡例  
 ← → 破砕部範囲\*  
 ※: 写真上は白色で記載

第7.4.4.248図 (1) 破砕部性状 H24-D1-1 深度45.91~48.28m (破砕部の検討)



H24-D1-1 深度45.91~48.28mについて 破碎帯範囲を45.91~45.94m (No.最-3) , 46.30~46.45m (No.最-5) 及び47.64~47.75m (No.最-7) に変更

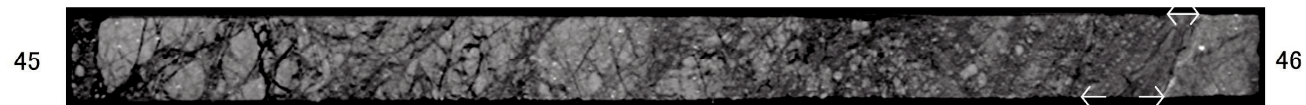
<CT画像観察結果>

- ・深度45.00~45.91m, 45.94~46.00mは破碎部相当箇所なし。
- ・深度45.91~45.94m破碎部。

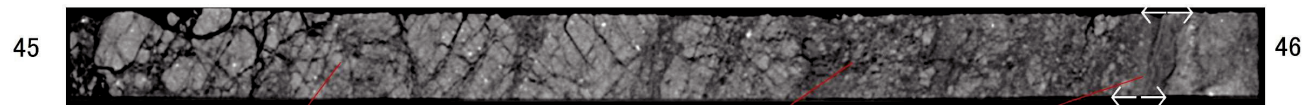
コア写真



CT画像



CT画像(側面)



概ね均質で、周辺より密度が高く、亜円礫の配列や縞状のせん断面・破碎構造は認められない。規則的な節理が認められる。

亜円礫の配列や縞状のせん断面構造・変形構造が認められる。

角礫化して、基質の密度が低いが、亜円礫の配列や縞状のせん断面・破碎構造は認められない。規則的な節理が一部残存している。

凡例  
 ← → 破碎部範囲※  
 ※:写真上は白色で記載

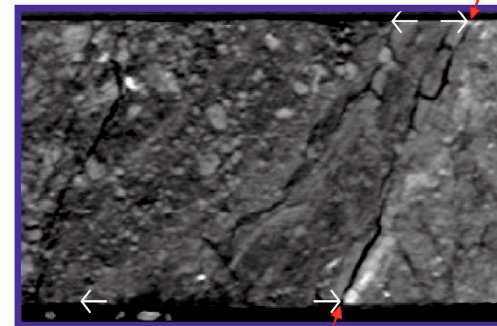
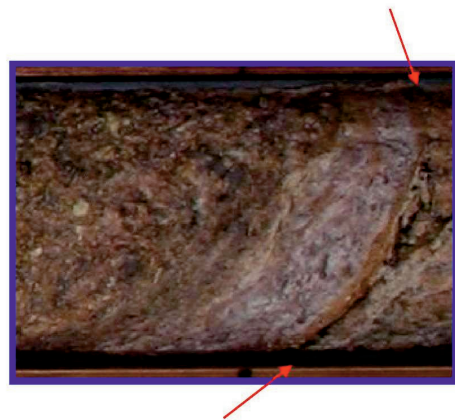
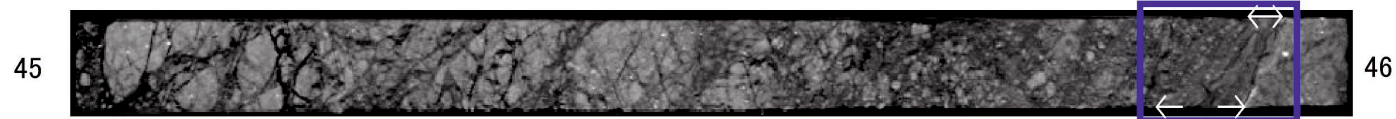
第7.4.4.248図 (2) 破碎部性状 H24-D1-1 深度45.00~46.00m (CT画像による評価 (1/3))

H24-D1-1 深度45.91~48.28mについて 破碎帯範囲を45.91~45.94m (No.最-3) , 46.30~46.45m (No.最-5) 及び47.64~47.75m (No.最-7) に変更

コア写真



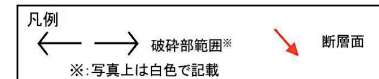
CT画像



※このCT画像は、青枠内の区間を解像度を上げて撮影した

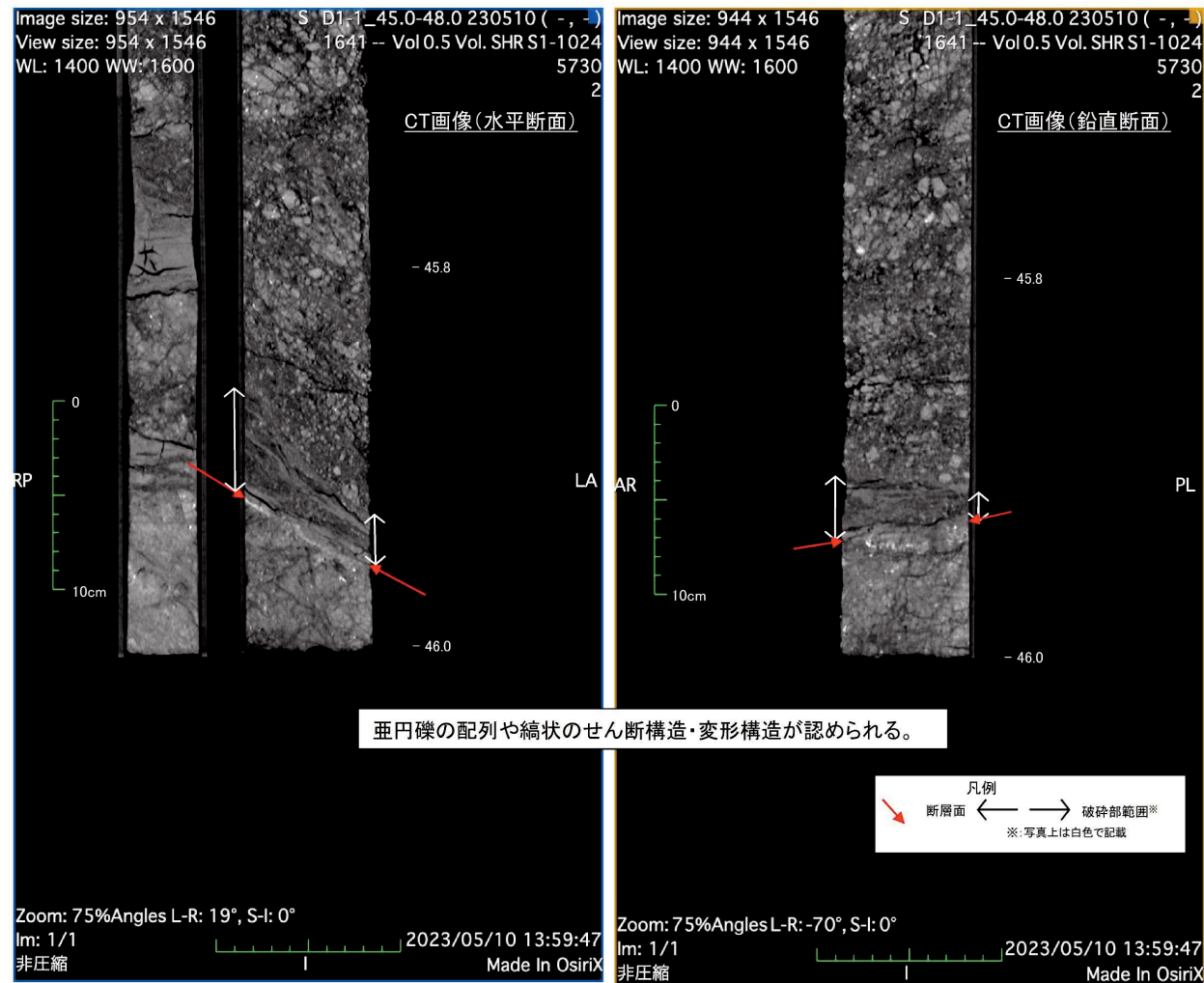


亜円礫の配列や縞状のせん断構造・変形構造が認められる。



第7.4.4.248図 (3) 破碎部性状 H24-D1-1 深度45.00~46.00m (CT画像による評価 (2/3))

H24-D1-1 深度45.91~48.28mについて 破碎帯範囲を45.91~45.94m (No.最-3) , 46.30~46.45m (No.最-5) 及び47.64~47.75m (No.最-7) に変更



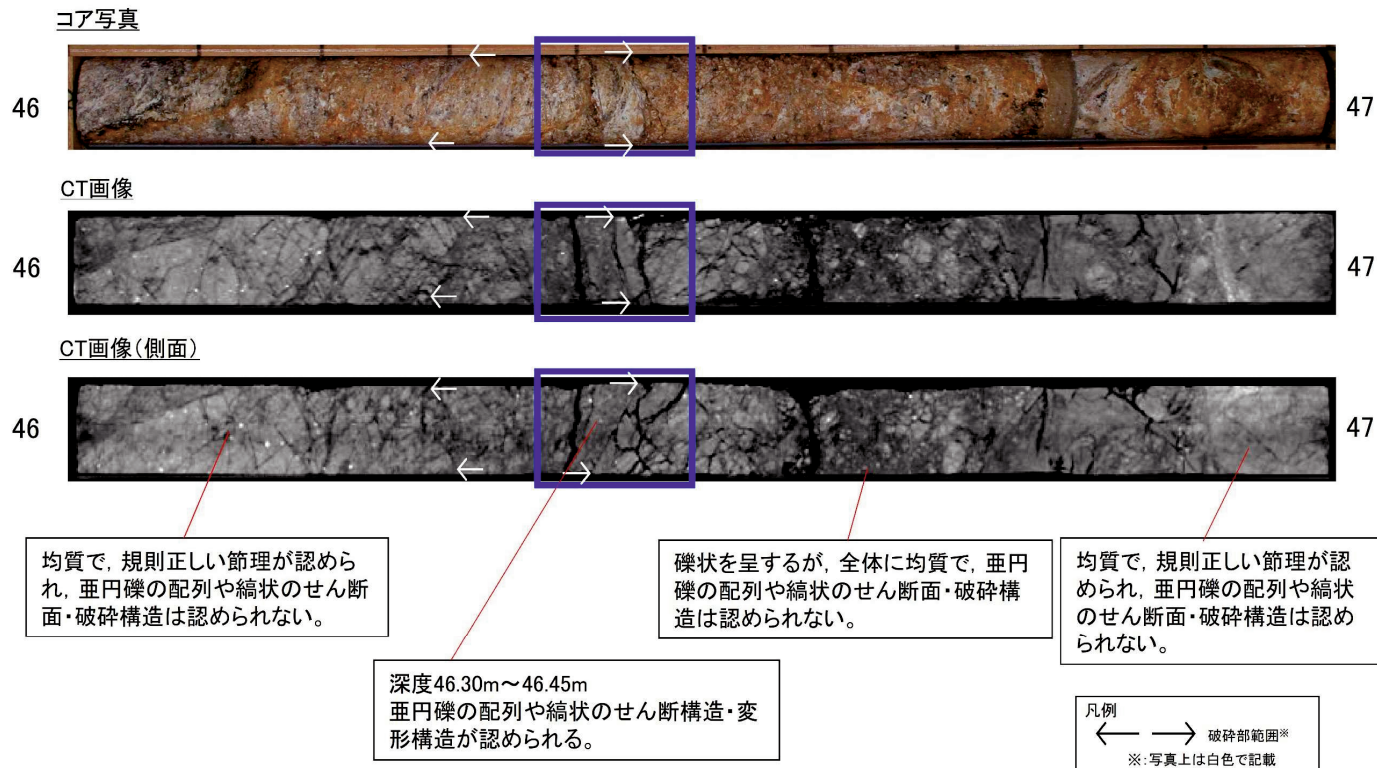
第7.4.4.248図 (4) 破碎部性状 H24-D1-1 深度45.00~46.00m (CT画像による評価 (3/3))



H24-D1-1 深度45.91~48.28mについて 破碎帯範囲を45.91~45.94m (No.最-3) , 46.30~46.45m (No.最-5) 及び47.64~47.75m (No.最-7) に変更

<CT画像観察結果>

- ・深度46.30~46.45m破碎部, その周辺は破碎部相当箇所なし。
- ・深度46.77~46.79mの水平方向の暗褐色の細粒部は掘削時のコアの供回りによるものである。



第7.4.4.248図 (5) 破碎部性状 H24-D1-1 深度46.00~47.00m (CT画像による評価 (1/4))